山本達也『舞台の上の難民―チベット難民芸能集団の民族誌』（京都：法藏館、2011 年、114 頁、本体 6,000 円＋税、ISBN978-4-8318-7441-2）

（評）竹村　嘉晃*

チベットをめぐる言説や商品が世界規模で流通・拡散するなか、日本ではこれまでチベットの芸能を扱った研究がほとんどみられなかった。本書は、ダラムサラに拠点を置くチベット難民社会の文脈からチベット芸能の現代性を捉え、チベット・ナショナリズムを体現する存在として、亡命政府の傘下にある芸能集団（Tibetan Institute of Performing Arts、以下 TIPA）の演者たちの生を詳細に描いた点に最も大きな特徴がある。

* 人間文化研究機構地域研究推進センター研究員／現代インド地域研究国立民族学博物館拠点拠点研究員（芸能人類学、インド地域研究）

・ 2014、「インド・ケーララ州出身者たちの神霊を介した故地とのつながり」、細田尚美編『湾岸アラブ諸国における移民労働者―「多外国人」国家の出現と生活実態』明石書店、229 250 頁。

・ 2012、「鉄道組合が祀るローカル神―南インド・ケーララ州における神霊信仰の隆盛と『ダルシャン運行』」、『民族藝術』28 号、92 100 頁。

本書において著者が挑んだのは、チベット難民を「政治的経済的な力学が猛威をふるう国際社会という舞台の上」（p. 47）に立たされた人びととして照射し、彼らが構成するグローバルな世界と結びついた難民社会において、ラサ中心主義的なチベット・ナショナリズムという包摂と排除が同居した文化観や実践が浸透している様相を TIPA の活動から浮かび上がらせる傍ら、伝統と現代の両者のはざまのなかで生き、またそこに当てはまらない人びとの葛藤や揺れを考察することである。その作業を通して、著者は従来の研究における「チベット難民」という枠組みの有効性を再考し、「『団結の言説』やアイデンティティの言説と折合の良い人道主義や政治的イデオロギーによるチベット難民との関与とは異なった関係性のあり方」（p. 45）を「共在性」という視座のもとで捉え、チベット難民社会についての語り口を複数化することを試みている。

考察の核となっているのは、フィールドワークで得た資料や内在的視点にもとづく知見と言説分析である。本書全体を通底するのは、当該社会に内属した著者が徹底して対象に目線を合わせ、人びとにより沿う姿勢であり、同時に異なる特質をもつ個々の事象を丁寧に描き出し、かつ理論的系譜に嵌め込みながら論を展開する冷静さである。

本書は筆者が 2009 年に京都大学大学院人間・環境学研究科に提出した博士論文を書き直したものである。序章に続く九つの章と終章のほか、著者と TIPA の演者たちとの日常生活の光景などを主観的かつエッセイ風な手法で綴った四つの Interlude が隔章に挿入されており、それら全体が三部で構成される。

第一部「伝統を生きる芸能集団」では、TIPA の演者たちが表象する伝統芸能に焦点をあて、1950 年代以前のチベット文化を体現するチベット難民としての集団的主張を成し遂げるために、チベット・ナショナリズムの浸透やアイデンティティの構築を目指した TIPA の文化政治的な活動の様相を問うと共に、そこに孕む排除的な側面を考察している。第二部「現代を生きる芸能集団」では、われわれと彼らの同時代的な位相を描き出すことを主眼におき、1980 年代以降に興隆した現代的な音楽であるチベタン・ポップとそれを取り巻く環境に焦点をあて、メンバーの一員として参加したレコーディング過程における様々な交渉やその過程で演者たちに投げ返される社会的文化的な意味の内実を考察している。第一部と第二部が TIPA の演者たちや彼らの芸能実践を「集団としてのディアスポラ」という視点から描いているのに対して、第三部「伝統と現代のはざまで」では、「ひととしてのディアスポラ」という視座のもと、芸能実践に携わる自らの姿勢や自分たちが体現するナショナリズムに容易に一体化できず、難民社会において居心地の悪さや葛藤を覚える一人の演者とのやりとりを内在的な視点から詳述している。終章では、それまでの議論を要約した上で、これまで形成されてきたチベット・ナショナリズムの可能性と限界を提示し、われわれがチベット難民社会といかに向き合っていくのか、新たな共同性に関する試論が展開される。

本書は多くの興味深い論点を提示しているが、以下、本稿では芸能研究に携わる評者の立場から本書の特色について三点に絞り、些少ながら評言を加えたい。

第一に、本書では、フィールドワーク中にTIPAの一員となって彼らの社会に内属した著者が難民社会と完全に同調できず揺れ動いている人びとに対して抱いた親近感を端緒にして、「チベット難民」として呼びかけられ、当該社会が課す社会的文化的な拘束を生きていかざるをえない彼らの生の営みについて、芸能実践を含む彼らの日常に立脚した視点から明らかにしている。

質的量的なデータが重要視されがちな民族誌的記述に対して、そこで生活する人びとの息吹をすくい取り、かつ彼らとのやりとりを再帰的に記述する本書は、同時に言説分析の手法をとることで叙述の客観性を担保している。著者はその意図について、「私とTIPAの人びととのあいだでしか生じない接触領域に関する思いから生まれたものである」（p. 11）と述べている。こうした記述の手法は、エチオピアの音楽誌を描いたシュレメイの研究と相通じるものであり[1)]、当該社会に内属した著者自身がTIPAの演者たちと「共在性」を生きていたからこそなし得たものに他ならない。

本書の特色の第二点目は、特定の個人へ焦点をあてることに重点を置いており、その手法によって、芸能集団と結びついているにもかかわらず、そこからこぼれ落ちてしまう個人の状況がいきいきと浮かび上がっている点にある。フィールドワークにおいて時空間を共有している相手は「集団という抽象的な存在ではなく、その社会に流通する言説や制度のただなかで生きている個々人である」（p. 379）という本書の指摘は、ともすると芸能集団や演者たちを一括りで捉えがちな芸能研究にとって説得力をもつ。

また、これまでのディアスポラ研究が「集団としてのディアスポラ」研究であり、そこにはディアスポラ的な生を送っている「ひととしてのディアスポラ」の視点が欠けていると指摘されている。そして、状況によって発現する個人の揺れや葛藤へ着目することは、単にアイデンティティ・ポリティックスという語り口だけに回収するのではなく、アイデンティティ・ポリティックスにおける複層性として提示することが必要であると説得的に示している。

第三点目は、〈芸能集団の民族誌〉と謳う本書は問題関心が多岐にわたり、学際的かつ広範囲な理論が縦横に駆使される一方で、芸能研究的観点から捉えると、どこか説明不足を感じる印象を拭いきれないものである。その要因とは、一言でいえばTIPAの演者たちが生業とする芸能の実態が伝わりにくい点にある。確かに、本書の意図は、難民社会で伝統文化の保護や現代的な音楽の創出を手がける彼らの生のありようを記述することにある。それゆえ、彼らが実演するパフォーマンスの場の包括的な記述や豊富な資料を求めることは的外れかもしれない。だが、イデオロギーに絡まれた彼らの文化表象や生を叙述の対象とするのであれば、むしろ彼らの生業かつ表現手段であるパフォーマンスの場を事実にそって詳細に叙述するための工夫や演目・作品の提示、さらには実践レベルにおける影響などを具体的に論じる必要があるのではないだろうか[2)]。

芸能は当該文化の価値観の一種の表現であるという理解にたつならば、パフォーマンスの場を描くことは、「芸能集団に属する演者が舞台の上で演じている」（p. 46）、あるいはその場に生きる彼らの姿をより明確に浮かび上がらせるはずである。また、彼らが伝統的なものから外れた踊りをみて、

「あれじゃまるでインド映画の踊りだよ」と揶揄したり、他のグループの上演を「中国風であり、過剰に現代化されている」と批判する言説（pp. 147 151）を分析する上でも、その担保となる彼らがいうところの〈伝統性〉や〈正統なる芸能〉の実態が平板な叙述によってしか提示されていないのであれば、単なる印象としか受け取られかねず、実証的な検証は不可能となる。全体の記述からは十分なデータを収集していることが窺え、また芸能集団に内属していた著者だからこそ知り得た知見なども持ち得ていると思われるだけに残念だが、今後、個別の事例に関するテーマを絞った論文などで詳細な記述・分析がなされることを願いたい。

このように述べたからといって、本書が紡いだ物語として読み応えのある内容を害するものではない。本書の論点が展開される上では、ディアスポラ研究や文化の客体化論だけでなく、アイデンディティや主体性に関する議論、ミクロ人類学や「共在性」といった様々なジャンルの議論が踏まえられており、かつそれらを越えようとする著者の意思がうかがえる。本書が切り開くのは、まさにそうした学際的な議論のアリーナであり、提示された数々の事例や分析は異分野の研究者がさらに広い視座を得る上で有益なものとなるはずである。本書の明示した視座が様々な学問領域を横断する形で議論されるのはもとより、南アジア地域に限らず日本における芸能研究のダイナミズムを切り開く礎となることを期待したい。

註

1）　シュレメイは、エチオピア正教音楽とユダヤ音楽とのつながりについて、フィールドでの体験を個人的な語り口でつづっている。彼女はフィールドワーク中にエチオピア在住のユダヤ人と結婚したことを契機に、エチオピア在住の上流階級のインサイダーとなり、軍部のクーデターによって引き起こされる社会主義革命の前夜の緊迫した様子を内側のまなざしから描き出している［シュレメイ 2009］。

2）　近年では民族音楽学の領域でも、「パフォーマンス」の概念の再検討がなされ、音楽が実演される場を生き生きと捉え返そうとする試みがみられる［cf. Turino 2008; スモール 2011］。

参照文献

シュレイメイ、ケイ・カウフマン、2009、『エチオピア音楽民族誌—ファラシャ／エチオピア聖教／望郷歌』、柘植元一訳、アルク出版企画。

スモール、クリストファー、2011、『ミュージッキング—音楽は〈行為〉である』、野澤豊一・西島千尋訳、水声社。

Turino, Thomas, 2008, *Music as Social Life: the Politics of Participation*, Chicago: the University of Chicago Press.